■第５章－概説その１■

749 年、聖武天皇は娘の孝謙（こうけん）天皇に譲位し、756 年に崩御しました。

孝謙天皇の時、政治的権力を手にしていたのが藤原不比等（ふひと）の孫にあたる仲麻呂です。

孝謙天皇や、その母で聖武天皇の皇后だった光明子（こうみょうし）から絶大な信頼を得ていた仲麻呂ですが、光明皇太后の死や、孝謙天皇が道鏡（どうきょう）と出会った頃から、運命の歯車が狂いだします。

764 年、仲麻呂は、のちに恵美押勝（えみのおしかつ）の乱とよばれるクーデターを起こして失敗し、悲惨な最期を遂げました。

乱の平定後、再び天皇の位に就いた孝謙改め称徳天皇は、僧道鏡とともに仏教優遇政策を進めました。

展示品の法隆寺百万塔は、恵美押勝の乱の戦没者を鎮魂するため、称徳天皇が平城京内外の十大寺に分置させた百万基の木製三重塔のうちの一つです。

現在、法隆寺にのみ残存しており、そのうち残りの良い 100 点は重要文化財に指定されています。

塔身に納められた陀羅尼経（だらにきょう）は、お経を書写して塔に安置して供養すれば、現世の長寿・心身安楽が得られることを説いています。

展示品は、紙の破れがほぼなくお経の全文が読める貴重なものです。

国内最古の印刷物として名高く、黄染めの麻紙が使用されていると考えられます。